



一般社団法人COMHCa 創立記念イベント

2023年4月9日(日) online

記念シンポジウム「メンタルヘルスにおける対話」:

システムづくりと対話

ACTとOpen Dialogueから学んだことを活かす

一般社団法人COMHCa 共同代表

下平 美智代

Michiyo Shimodaira, Ph.D.



現在の関心

対話の場をつくる(語り聴くミーティングなど)
その場が成り立つ仕組み = システムをつくる

話題にしたいこと

1) システムづくり

2) 「対話の場」とは

ACTやOpen Dialogueが生まれたきっかけ

精神科医療の脱施設化・長期入院者の地域移行

ACT (Assertive Community Treatment)

包括型地域生活支援プログラム

1970年 アメリカ ウィスコンシン州
メンドータ州立病院
退院支援プログラムがうまくいかない
スタッフの話し合い
バーバラ・ロンツの支援＋チーム支援の構造
重い慢性の精神疾患をもつ人を医療・保健・福祉一体となったチームが病院ではなく、町のオフィスを拠点に24時間体制で支えるアウトリーチ支援のプログラム

Open Dialogue

1984年 フィンランド トルニオ
ケロブダス病院の長期入院の患者の
治療の見直し、退院支援から始まった
病院の多職種チームで話し合い・勉強会
患者の話を聴く・家族を呼んで家族の話しも聴く
その地域で唯一病床をもつ公立病院なので、
急性期の治療を担う病院としての取り組み
24時間の相談電話→まず治療ミーティングをする

初発の統合失調症圏の患者さんを5年間前向きに追った
研究では予後がよい(76%が就労・就学していた)・・・
それはなぜ？

オープンダイアログ 7つの原則

1. 迅速な治療提供→24時間以内にミーティングを開く
2. 家族などその人のネットワークを含める
3. 柔軟性と機動性(アウトリーチする・相手に合わせて動く)
4. 責任(緊急電話を受けた人が最後までコーディネートする)
5. 心理学的連続性(同じスタッフが継続的に関わる)
6. 不確かさに寛容であること
7. 対話主義

Seikkula, et al. (2006)



治療的会話

Anderson & Goolishian(1992)

訳 野口裕二, 野村直樹

対話的視点に立った治療プロセスをわれわれは治療的会話と呼ぶ。治療的会話とは、「問題」についての対話を通じて、理解や発見を共同で探索してゆく努力のことである。セラピー、つまり治療的会話は、「その場でその人とともに」進行するプロセスを必然的に伴う。そこでは、「相手に対して」語るのではなく、「**相手とともに**」語り合う。こうしたメカニズムを通して、セラピストとクライアントは、新しい意味、新しい現実、そして、新しい物語を共同で開発する。**治療者の役割、専門性、そして、力点**は、自由な会話の領域を開拓し、「新しい何か」が生じるような対話プロセスの発生を促進することにある。

治療的会話

Tom Andersen(1992)

訳 野口裕二, 野村直樹

自分や他者との「対話」が自分を知っていく道筋である。われわれが使う言葉が、その時その場でのわれわれの自己を形作っていく。この視点を最初に臨床に取り入れたのが、アメリカのハーレーン・アンダーソンとハロルド・グーリシャンである。新しい言葉に出会い、新しい意義を見つけ出す事は、**自分にとっての新しい自己に近づくことである**。治療的会話とはこの探索の一形式であり、新たな記述、新たな理解、新たな意義、新たな言葉の含み、そして最終的には新たな自己の定義へのつながる探索である。

治療的会話の癒しの要素

Seikkula & Trimble(2005)

訳 久野恵理

急性期の状況では、ネットワークのメンバー(患者やその家族)は、しばしば、問題に飲み込まれ、狭められた仕方では、その問題を理解し、コミュニケーションすることが出来なくなっているかもしれない。

治療ミーティングでは、チームのスタッフは、全ての人の発言を注意深く聞き、**敬意をもって応答する**。また、チームスタッフは、ネットワークメンバーが**感情をあらわすようにサポートする**。スタッフ自身も、一人の人として、包み隠さず、本心からの応答をする。ネットワークメンバーの感情によって心が動かされたことを包み隠さないためには、スタッフは、ミーティング中に起こる**強い感情に寛容である**ことが課題になる。ネットワークメンバーの前で、スタッフ同士の会話をすることは、リフレクティングチームの機能を果たし、ネットワークメンバーが、自分たちの経験を理解する可能性を拡大する。治療初期の段階では特に、極度のストレス状況における、先行きの見えなさに寛容になれるように、**何かを決めることよりも、会話の奥行きと幅を広げることを優先させる**

私の持ち場で

これを行うために
続けるために
どのような
仕組みをつくるか？

対話の場＝
‘相手と共に
語り合う’場

土台：Anderson, Goolishian,
Andersen, Seikkula, Mead, 禅

引用文献

- Andersen T (1992)(マクナミー, ガーゲン(2014):「リフレクティング手法」をふりかえって. In ナラティブセラピー, pp81-82. 金剛出版.)
- Anderson H, Goolishian H (1992) (マクナミー, ガーゲン(2014):クライアントこそ専門家である—セラピーにおける無知のアプローチ. In ナラティブセラピー, pp49. 金剛出版.)
- Bond GR, Salyers MP(2004). Prediction of Outcome from the Dartmouth Assertive Community Treatment Fidelity Scale. CNS Spectrums 9(12); 937-942.
- Seikkula J, Aaltonen J, Alakare B, et al(2006): Five-year experience of first-episode nonaffective psychosis in open-dialogue approach: Treatment principles, follow-up outcomes, and two case studies. Psychotherapy Research, 16(2); 214-228.
- Seikkula Y, Trimble D (2005) Healing Elements of Therapeutic Conversation: Dialogue as an Embodiment of Love. Family Process 44:461-475.
- 下平美智代(2015)さらに見えてきたオープンダイアログ フィンランド、ケロプダス病院見聞録. 精神看護18(2); 106-122.
- 下平美智代(2018)初心者がアウトリーチをどう始めるか精神科臨床サービス18:386-390.